

Back Number

本論文は

世界経済評論 2020年3/4月号

(2020年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



定期購読
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

今回のコラムのタイトルを見て、読者は私が何を書こうとしているのか不思議に思う事だろう。最初に結論を書けば私の意図はすぐに分かっていたのだが、今回は私の発見学習の経過から因果関係を説明し、結論は敢えて最後に記すことにする。

観察 1. アリゾナ州とメキシコの国境地帯にソノラ砂漠がある。その砂漠にサワロサボテンが繁殖している。サワロサボテンとは15メートル程まで高く育つ、人が腕を上げたような形をしたアリゾナ州を象徴するサボテンである。アリゾナ州の大都市フェニックスでも住人の間で人気があり、多くのサワロサボテンが長い間植えられてきた。ところが、最近そのサボテンが徐々に枯れ始めてきている。その原因が何と、フェニックスに住む多くの中流階級層の家庭の裏庭にある浅いプールが40度を超えるような真夏の気温で熱せられ、それから蒸発する水分によって市内の湿気が高まった事にある。ソノラ砂漠は湿度が殆ど無く、その環境に適応して繁殖してきたサワロサボテンにとって天敵となる害虫は皆無に近かったのが、多少の湿気の上昇によってもたらされた害虫による被害が致命傷となっている。サワロサボテンにとっては、まさに人的被害である。

観察 2. ハワイ旅行に行ったことのある方は実感していると思うが、山の上の方は雲が掛かかって良く雨が振り熱帯雨林になっているが、それ以外はハワイはどの島に行っても意外と乾燥している。特に島の西側は一般にアリゾナの砂漠のように乾燥している。日本人に馴染みの深いホノルルのワイキキビーチも乾燥していて、蚊もいない(生きていけない)。つまり、ハワイの島々が四方海に囲まれているから海からの湿気が多いという法則はどこにもない。つまり、深い海の表面温度が30度あったとしても蒸発する水分はそれほど

多くない。

観察 3. 私は毎年夏に日本の大学で夏季集中授業を担当しているが、東京にしても大阪にしても、とにかく湿気が多く蒸し暑い。そこで日本の大学生に何故日本は湿気が多いのかと質問すると、呆気にとられたかのように、日本は四方海に囲まれているし、太平洋側は黒潮の影響もあって湿気が多いのが当たり前だという答えが帰ってくる。とは言っても、東京や大阪の冬は、非常に乾燥していて風邪を引きやすいことを考えての答えだとは思えない。東京や大阪は夏も冬も同じように黒潮の流れる太平洋に面しているにもかかわらず、夏は湿気が多く冬は乾燥している。つまり、ハワイと同じように、日本が海に囲まれているから必ずしも湿気が多いという法則はどこにもなさそうだ。では何故、日本の夏は湿気が多いのだろうか。

観察 4. 観察 1, 2 を基に仮説を立ててみると、フェニックスの家庭用プールと同じように、日本の夏の湿気は太陽熱で熱せられた浅い「水溜」からの水蒸気によるものに違いない。その夏の間の浅い「水溜」とは、日本の水田である。冬は水田に水がはられてないため湿気はなく、気候的には乾燥している。日本の水田の総面積は、約245万ヘクタール程あると言われており、日本全土の約6.5%に相当する。公式のオリンピックサイズのプールに換算すると、約2000万個のプールの面積に値する。これだけ広い、深さ30cm程の「水溜」が温められて、そこから蒸発して出てくる水分を考えるとすれば、如何に日本の夏は湿気が多くなるか想像できる。俗に言うモンスーン気候である。正しく言えば、夏に水田を多く作るから、熱せられて蒸発する水分のために湿気が多くなる訳だ。

観察 5. 米国でもカリフォルニアのサクラメン

トバレーを中心とした中央部も以前は砂漠のように乾燥していた。ところが日系米国人によって稲栽培が盛んになって以来、カリフォルニアの中央部は夏の湿度は非常に高くなったが、冬は乾燥している。つまり、日本と同様に、水田の存在が夏と冬の湿度の差に大きく影響している。

観察 6. カリフォルニアではジャポニカ種と言われる所謂日本の米が多く栽培されている。日本のコシヒカリと同じように、カリフォルニア米にもブランドがつけられ、例えば、Calrose, Kokuho Rose, Nishiki, Tamanishiki といった名前で売られている。例えば、Tamanishiki とは日本のコシヒカリとユメゴコチの掛け合わせ品種である。味も日本の米と同じように美味しく、カリフォルニア産の米は日本の値段と比較して、半値強で市販されている。ジャポニカ種の「日本系」の米はカリフォルニアばかりでなく、オーストラリア、ヨーロッパ、そして東南アジアでも同じように生産されている。

観察 7. 日本の米の生産は日本の食料安全保障を支えるために不可欠であると考えられており、日本は関税割当を確立し、米と米製品の輸入に量的制限を設けている。確かに、最近の環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTPP）とか日本・EU 経済連携協、そして米国との二国間貿易協定を通して、日本側も米の輸入に関して多少は譲歩してきているが、基本的にはまだまだ米の輸入に関しては保護貿易を通して、日本の統計によると、日本国内の全体の米の消費は徐々に低下してきているが、米の家

畜用飼料として使われる割合が増えてきているため、食事用の米の供給は低下している。結果として、日本人の所得が低迷してきている現在、生憎日本で食事用の米の値段は上昇してきている。

観察 8. では今までの観察から明らかになった因果関係を基にして、日本政府へ経済政策の提案をしてみたい。ジャポニカ種の米の供給先は世界中に多数にあるばかりでなく、海外の日本米の味も質も日本のもとと変わりはない。しかも、日本国産の米と比べると遥かに安価である。日本の食料安全保障の理由で、米の輸入を厳しく制限している日本の政策は時代錯誤のものとしか見ええない。日本が米の輸入自由化を促進することで、当然ながら国内の米の値段が下がり日本人の実質上の購買力が上がるのは、当たり前のことのように読者の皆様もご存知のことと思う。私はもっと大きな派生的なメリットを考えている。日本で水田面積を縮小する事によって、日本の夏の湿度が下がり、つまり生活しやすくなることだ。農民が米離れをし、他の作物を作る畑として変換することもできる。また平らな土地の供給が増加するので住居地として再開発もでき、居住面積の供給が増加し、全体で地価が下がり、もっとゆったりとした、そして湿度の少ない爽やかな住居環境ができるのではないだろうか。

高齢化する日本社会にとって、国民の生活の質の向上に力をいれた日本政府の経済政策を心から期待したいものである。

こたべまさあき テンプル大学フォックス経営大学院教授